

中国人日本語学習者における語頭第 1 拍の音響的特徴 —中国北方方言話者の語頭ピッチ曲線を中心に—

許 霖

1. はじめに

中国語母語話者(以下、学習者と称する)が、日本語を学習する際の日本語アクセントの習得について、戸田、二通、松崎など多くの音声学者が研究を行っている。しかし、今まで学習者のアクセント核やピッチの下がり目の研究(二通 1996、松崎 1994、1995)は多いが、語頭韻律に関する研究は少ない。

日本語、中国語のアクセントは、ともに語句に固有の音程の高低による対立が認められる「高低アクセント」に属するとされる(山田 2005)。日本語の共通語アクセントは「平板型」、「中高型」、「尾高型」、「頭高型」の 4 種類である。その 4 種類のうち、1 拍目が高い「頭高型」以外の 3 種類は 1 拍目が低い。これに対し、学習者の母語である中国語にある 4 種類の声調のうち、第 2 声と、第 3 声の後半部分は低高というパターンである。しかし、王(2002)は日本語の語頭韻律について「500 例の実験語のうち、降昇¹が使われたのは 10 例しかなく、中国語の第二声と最も近いピッチ曲線ではあるが、日本語であまり使われない音調だといえる」(p.296)と述べた。

これらの点を踏まえ、本稿は学習者における日本語語頭韻律の生成特徴に着目し、彼らが 1 拍目の低さをどのように実現するかを考察する。

¹ 王(2002)の「降昇」は王(2001)の先端下降後上昇型に類似する。

2. 先行研究

日本語と中国語における 1 拍目のピッチ曲線による比較研究

王(2000)は中国語の四声と東京語アクセントを比較するため、39 の日本語単語とこれらの単語の音質に極めて近い中国語に音訳したものを音声実験資料とした。以下に1拍目低音に関する音響分析の結果を抜粋して掲げる。

- ・ 短音のみからなる語の 1 拍目低音の高さは戸田・黄(1989)が指摘した「中国語の「5 度標調法」³³である」
- ・ 平板・尾高・中高型アクセントの核前の 1 拍だけの低音はいろいろな形をしている。中国語の第 1 声は最後まで一定の高度を要求し、半 3 声²の形も必ず最初はやや下降し、次は平らに続く。
- ・ 同じく、アクセントの核前の 1 拍の低音には、同じ人物の発音でも、異なる形が見られる。中国語にはこのようなゆれが見られない。
- ・ 中国語話者の「辛抱」の母音[i]のピッチ曲線は日本語話者と異なり、急激に下がる。同様の現象が「チーズ」、「クーラー」、「感謝」などにも見られる。

日本語話者における語頭韻律の特徴

王(2001)は、日本語の語頭韻律の特徴を明らかにするため、14 人の東京語話者を集め、実験資料を音読させて、その音声データを分析した。東京語話者における日本語語頭跨拍音のピッチ曲線の特徴を、語頭子音の有声と無声に分けて観察を行い、ピッチ曲線の形状によって平坦型、放物線上昇型、先端下降後上昇型に分類した。結果は、語頭子音が有声の場合、平坦型が 23%、放物線上昇型が 76%、先端下降後上昇型が 1%となり、語頭子音が無声の場合、平坦型が 85%、放物線上昇型が 12%、先端下降後上昇型が 3%となった。16 人の上級学習者の全体的な特徴として王は「多くの学習者は語頭有声・無声を問わず、中国語の第 2 声のピッチ曲線、先端下降後上昇型に似ている。…中国語の影響によるものと言えよう」と述べた(2001、p.90)。個別的な特徴としては中国語の第 4 声のような「垂直」下降型に似ているのも見られた。

² 中国語の第 3 声は本来下降してから上昇するが、上昇が消失することも多い。下降だけで実現された第 3 声を半 3 声と呼ぶ。中国北方方言に普遍的に存在する特徴である。

日本語と中国語における文頭イントネーションの比較研究

盧(2006)は日本語話者と中国語話者の男女1名ずつ、計4名の母語話者を用い、日本語と中国語の「平叙文」、「命令文」、「疑問文」の文頭イントネーションを分析した。まず、中国語の文頭第1音節について、「命令文」⇒「疑問文」⇒「平叙文」という順にピッチが低くなっていることが確認された。最も高い基本周波数の中央値は、第4声で始まる文であった。最も低い基本周波数の中央値は、第3声で始まる文であった」という結果になっている。次に、日本語について、「文頭位置ではアクセントの影響より、いわゆるアクセント核のない「低く始まるグループ」とアクセント核がある「高く始まるグループ」とでは明瞭な差異が生じた」と指摘した。最後に、「平叙文、疑問文、命令文はそれぞれに出だしの部分のピッチがお互いに異なる」と強調した。

先行研究のまとめ

以上の先行研究を踏まえ、本稿で主に扱う日本語話者と学習者の主要な特徴を以下のようにまとめる。

日本語話者の場合

- ・ 語頭子音の有声・無声により、語頭のピッチ曲線は、放物線上昇型ないし平坦型が優勢になり、先端下降後上昇型はほとんど見られない。
- ・ 平板・尾高・中高型アクセントの核前の1拍だけの低音は異なる形が見られ、同じ人物の発音でも、異なる形が見られる。

学習者の場合

- ・ 語頭子音の有声・無声を問わず、語頭のピッチ曲線は中国語の第2声の先端下降後上昇型に似ている。
- ・ 中国語の第4声のように「垂直」下降型に似ているのも見られる。

しかし、中国人日本語学習者の語頭韻律の研究については、筆者の見た限りでは王(1999、2000、2001)しか見つからず、学習者も全員台湾出身であった。出身地、方言の差などを考慮し、方言別で調査を行うべきであろう。本稿では中国の大学の日本語専攻に所属する北方方言話者を分析対象者とし、学習者が生成する日本語語頭韻律の特徴を明らかにする。

3. 調査概要

前節では学習者における日本語の語頭韻律の特徴について述べた。この節では本稿の調査過程、調査内容などについて述べる。

3.1 調査協力者の構成

3.1.1 母語話者

本調査に協力を得た日本語母語話者(以下、母語話者と称する)は東京語の話者で、音声学専門家であり、その発音は標準日本語の発音であると考えられるため、母語話者の人数は1名とした。この母語話者の音声データを本調査の標準データとし、学習者のものと比較し、分析する。

3.1.2 学習者

本調査は中国における学習者の日本語音声特徴を分析するので、出身地、滞日経験などを考慮し、協力する学習者に次の条件を設けた。

- ・ 日本に留学や旅行などの理由で滞在した経験のない者
- ・ 中国の北方方言を母語とする者
- ・ 大学に入るまでに日本語を学習した経験のない者
- ・ 1年以上日本語を学習した者

以上の条件を踏まえ、中国遼寧省大連市にある遼寧師範大学と大連大学に在学している日本語専攻の2、3、4年生を本調査の協力者とする。両大学の3つの学年を合わせた96人の学習者のうち、出身地、学習時間、録音時の雑音などの理由で6人を分析対象から除外した。最終的に分析対象とした学習者数は90人である。

表 3.1 学習者の内訳

遼寧師範大学		大連大学	
学年	人数	学年	人数
2 年	14 人	2 年	20 人
3 年	9 人	3 年	23 人
4 年	4 人	4 年	20 人

3.2 録音期間と場所

本調査の録音³は 2008 年 9 月 12 日～2008 年 9 月 25 日の 14 日間に渡って行った。学習者の学習生活を妨害しないように、学習者の授業のない時間帯や、放課後から門限までの時間帯などを利用した。

大連大学の学習者の録音は同大学の外国語専攻棟にある音環境が比較的よい会議室で行った。

遼寧師範大学の学習者の録音は遼寧師範大学の外国語教育棟にある音環境のよい日本語研究室で行った。

3.3 録音機器と音響分析ソフトウェア

本調査の録音は両大学間を頻繁に長距離移動するため、小型軽量の録音機、ROLAND 社製 R-9 ポータブル・レコーダーを使用し、非圧縮デジタル録音を行った。録音データは WAV 形式、サンプリング周波数 44.1kHz、サンプルサイズ 16bit で SD カードに保存した。音響分析ソフトウェアはフリーソフトウェアの praat である。praat はスペクトル、フォルマント、基本周波数等を抽出測定できるなど、多くの機能を備えている。

3.4 録音手順と調査対象語

学習者の録音日時を統一することができないため、それぞれの学習者の都合に合わせて、録音を行った。学習者の日本語韻律に影響を与える可能性を排除するため、学習者と会ってから録音を終了するまで、録音実施者(筆者)は学習者との会話をす

³ 本稿の音声データは、2008 年度名古屋大学大学院国際研究科国際コミュニケーション専攻提出の修士論文用の音声データとともに収集したものである。

べて中国語で行い、待機中の学習者にも録音材料を黙読するように指示した。録音中、学習者がこれらの対象語を文のように続けて読まないように、メモ帳の 1 ページに 1 つの単語だけを記入し、録音実施者がページを捲ることで学習者のリズムをコントロールした。学習者が同じ単語を何回も読んだ場合、最終回のデータを使用することとした。

本稿の研究目的は学習者の日本語における相対的に低い 1 拍目のピッチ曲線の特徴を明らかにすることにあるので、対象語を平板型、中高型、尾高型の 3、4 拍語にした。特殊拍がある場合、学習者は特殊拍をその先行する拍と融合して 1 音節で発音するという報告があるので(劉 2006、許 2007)、2 拍目に長音、撥音、促音のない単語を選び、また、王(2000、2001、2002)の研究で 1 拍目が拗音である場合のピッチ曲線の形状が、単純な子音と母音の組み合わせや、母音のみの場合と異なることがわかっているため、1 拍目に拗音がない単語を選んだ。そして、1 拍目もピッチ曲線が完全に現れるようにするため、対象語の 1 拍目をすべて有声音とした。学習者が読みやすいように、漢字には平仮名をつけた。

調査対象語は下の表 3.2 のとおりである。

表 3.2 対象語

	3 拍語	4 拍語
平板型	棗(なつめ)、雪崩(なだれ)	鶏(にわとり)、疑う(うたがう)
中高型	否む(いなむ)、疎む(うとむ)	装う(よそおう)、侮る(あなどる)
尾高型	逃げ場(にげば)、打ち身(うちみ)	謎解き(なぞとき)、水引き(みずひき)

4. 調査結果

この節ではまず学習者のピッチ曲線の推移の特徴について分析し、それから母語話者と学習者の語頭ピッチ曲線の下降幅を比較検討する。

4.1 学習者のピッチ曲線の特徴

ここでは、まず学習者が発話した対象語の 1 拍目のピッチ曲線を抽出し、その形状を分類する。

4.1.1 3 学年の全体的特徴

音響分析の結果、学習者の1拍目のピッチ曲線は、その形状により以下の7種類にまとめることができる(付録1参照)。

- ・ ほぼ垂直に急激に下降するピッチ曲線、以下「急降」と称する。
- ・ \ のように斜めに下降するピッチ曲線、以下「斜降」と称する。
- ・ \ / のように斜めに下降してから上昇するピッチ曲線、以下「斜降昇」と称する。
- ・ _ のように斜めに下降してから平で横に進むピッチ曲線、以下「斜降平」と称する。
- ・ / のように斜めに上昇するピッチ曲線、以下「斜昇」と称する。
- ・ /_ のように斜めに上昇してから平で横に進むピッチ曲線、以下「昇平」と称する。
- ・ _ のように平で横に進むピッチ曲線、以下「平坦」と称する。

表 4.1 学習者の1拍目のピッチ曲線の形状と人数

形状 対象語	急降	斜降	斜降昇	斜降平	斜昇	昇平	平坦 ⁴
あなどる	1	13	18	29	6	2	21
いなむ	19	11	12	20	2	3	23
うかがう	16	27	3	19	3	4	18
うちみ	11	26	0	24	0	0	29
うとむ	13	30	1	26	2	1	17
なぞとき	8	39	17	13	0	0	13
なだれ	11	36	22	13	0	1	7
なつめ	7	32	15	21	1	0	14
にげば	8	30	18	24	0	2	8
にわとり	5	16	45	12	4	0	8
みずひき	7	37	14	20	0	3	9
よそおう	10	41	12	16	0	0	11

⁴ 本稿では上昇・下降幅が 10Hz 以内のピッチを「平坦」ピッチと判定する。

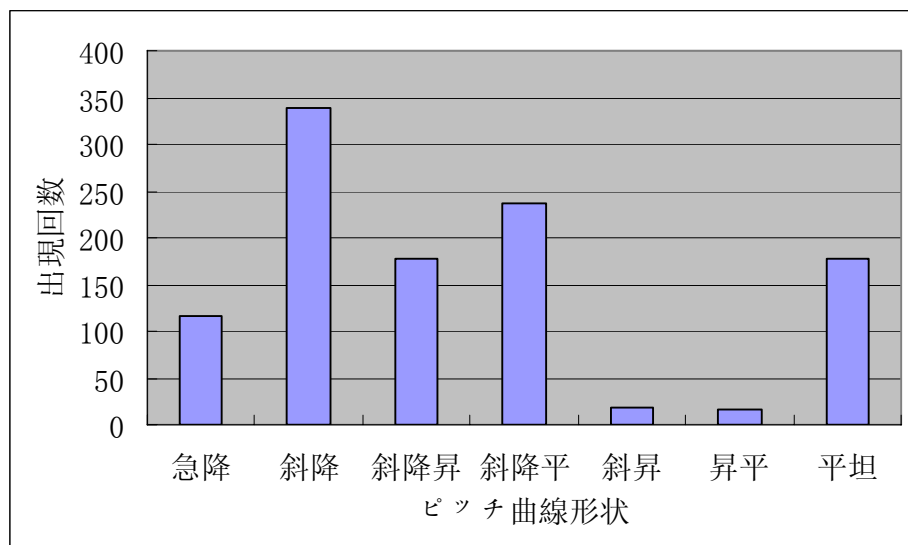


図 4.1 各ピッチ曲線形状の出現回数

表 4.1 と図 4.1 から、学習者は相対的に低い 1 拍目を主に下降ピッチで実現することが明らかである。相対的に低い 1 拍目を実現する際に、学習者のピッチパターンは一定せず、急降、斜降、斜降昇、斜降平、平坦の形状になる場合が多いが、斜昇、昇平は少ない。

4.1.2 学年別に見た語頭韻律の出現回数

4.1.1 節で 3 学年の全体的なピッチの特徴を見た。この節では学年別に、各ピッチ曲線の出現回数を見ることにする。

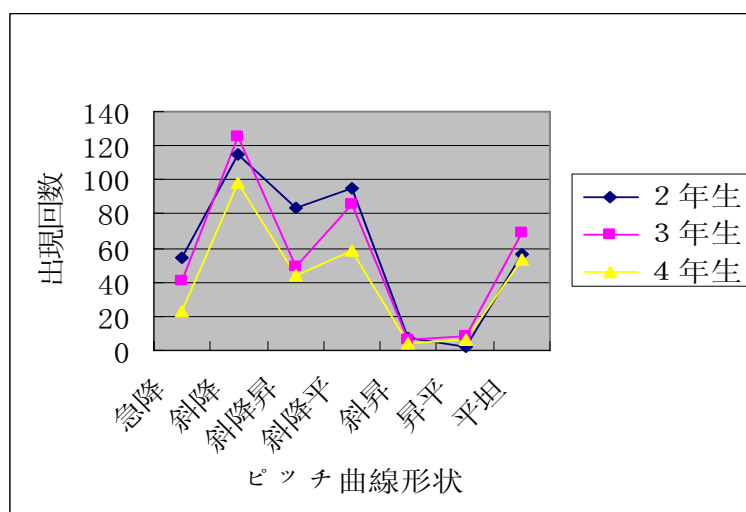


図 4.2 学年別のピッチ曲線形状と出現回数

図 4.2 から、学年と関係なく、ほとんどの学習者は主に下降するピッチで日本語における平板型、中高型、尾高型の相対的に低い 1 拍目の低さを実現することが明らかである。

下降ピッチのうち、急降、斜降昇、斜降平のピッチ曲線の出現回数は 2 年生から 4 年生にかけて徐々に減少していくのだが、斜降のピッチ曲線の出現回数は 3 年生、2 年生、4 年生の順に少なくなり、学年進行と一致しない。さらに、3 年生の斜降昇は 4 年生に近く、斜降平は 2 年生に近い。従って、日本語学習の進行に伴う各ピッチパターンの使用回数の増減は一定ではなく、そこに何らかの規則性を見出すことはできない。

平坦のピッチ曲線は斜降昇とほぼ同じ回数で出現しており、斜降と同じように 3 年生、2 年生、4 年生の順序で少なくなるが、3 つの学年間の差はわずかしかない。7 種類のピッチ曲線のうち、最も使用されなかったピッチ曲線は斜昇と昇平であり、3 つの学年でほとんど差がない。

ここまでの分析で、学習者は相対的に低い 1 拍目を実現するために、主に下降ピッチを使用したことがわかった。しかし、王 (2002) が明らかにしたように、下降ピッチ曲線は日本語を母語とする話者にもよく使用される。以下では学習者と母語話者のピッチの下降する幅を比較し、差の有無を確認する。

4.1.3 学習者におけるピッチ曲線の成因の考察

ここまでの学習者における 1 拍目のピッチ曲線形状の分析で、3 つの学年の全体的特徴、学年別の特徴が明らかになった。この節では、学習者の発話に見られる低い 1 拍目のピッチ曲線の成因について考察する。

5 人の中国語話者に 4 つの下降ピッチのデータを聞かせ、1 拍目のピッチは中国語のどの声調に聞こえるかについて調査した結果、8 割近くが中国語の第 3 声に聞こえると判断された。第 2 節でも触れたように、王 (2000) は「短音のみからなる語の 1 拍目低音の高さは戸田・黄 (1989) が指摘した「中国語の「5 度標調法」33 である」と述べ、日本語の低い 1 拍目の高さが相当する中国語における声調の音域について結論を出した。しかし、中国語では平らな声調が第 1 声 55 のみであるので、3 の高さから平らに発話することは学習者にとって難しく、慣れない音調だと考えられる。第 2 声は最初やや下降するが、それから上昇しないと第 2 声として成り立たず、第 4 声という下降声調

は上昇してから急峻に下降する声調なので、学習者の1拍目のピッチに影響を与えるとは考えにくい。残った下降する声調は第3声しかない。第3声は本来下降してから再び上昇する声調だが、現在、特に北方方言では上昇する部分のピッチがほとんど消失し、下降する部分だけで成り立っている声調であり、下降する目標となる高さも33に近い。学習者が生成する1拍目の下降ピッチの多くは中国語話者に第3声のように聞こえ、中国語の声調のうち、第3声の下降するパターンは学習者の1拍目の下降ピッチに最も似ており、下降する目標の高さも低い1拍目の3に最も近いという3つの理由で、学習者は中国語の第3声の下降ピッチで1拍目の低さを実現したと考えられる。

この結果によって、一部の学習者は平坦なピッチで1拍目の低さを実現するが、多くの学習者は中国語の第3声で1拍目の低さを実現する可能性が大きいといえるだろう。

4.2 学習者と母語話者におけるピッチの下降幅および「急降」の拍の持続時間

まず、4.2.1節で学習者の下降ピッチの高点と低点の差の平均値を割り出し、この平均値と母語話者の高点と低点の差を比較する。その後、4.2.2節で「急降」の拍の持続時間の平均値を下降ピッチの拍の平均持続時間、「急降」以外のピッチの拍の平均持続時間と比較する。

4.2.1 ピッチの下降幅

母語話者の相対的に低い1拍目の下降幅は「あなどる」、「なだれ」以外全部10Hzから15Hzの間になっている。これに対し、学習者の平均下降幅は約20Hzから約60Hzの間にある。4種類のピッチ曲線の中で、「急降」の下降幅が最も大きく、他の3種類の下降幅の倍以上、あるいは倍近くになっている。学習者の「急降」の下降幅を母語話者と比べると、その激しい差は一目瞭然である。表4.2の分析を通し、学習者はどのような下降ピッチで相対的に低い1拍目を実現するにしても、その平均的な下降幅は母語話者の下降幅よりはるかに大きいことが明らかになった。ただし、個人別に見た下降幅は70Hzを超える学習者も何人かいるのに対し、母語話者とほぼ同じ下降幅である学習者もあり、個人間の差も大きい。

表 4.2 学習者と母語話者におけるピッチの下降幅

学習者のピッチ下降幅の平均値 (Hz) ⁵ と最大値/最小値					母語話者の ピッチ下降幅
形状 対象語	急降	斜降	斜降昇	斜降平	
あなどる	57 ⁶	44 67/13	26 47/15	39 51/11	2
いなむ	48 91/32	36 58/12	22 44/13	35 49/12	11
うかがう	35 69/26	27 61/11	21 38/16	30 47/11	12
うちみ	41 74/30	33 59/14	0 ⁷	28 54/12	13
うとむ	31 79/21	28 64/12	23 46/12	21 56/13	12
なぞとき	46 84/27	29 77/12	19 41/13	26 61/12	11
なだれ	43 78/23	31 71/15	20 51/12	28 56/15	0
なつめ	41 88/26	26 64/17	19 49/14	22 51/12	11
にげば	61 103/28	40 77/13	21 52/11	33 58/14	12
にわとり	55 94/31	28 68/13	23 48/13	36 62/11	15
みずひき	51 78/23	44 67/12	29 55/13	33 57/12	12
よそおう	53 79/27	38 58/14	27 49/15	31 68/11	15

4.2.2 「急降」と他の下降ピッチを含む拍の持続時間

この節では学習者において、非常に際立っている「急降」ピッチに着眼し、他の下降ピッチの拍の持続時間の平均値、全下降ピッチの拍の持続時間の平均値と比較する。

1 拍目の持続時間を見ると、多くの場合、急降⇒斜降⇒斜降昇⇒斜降平の順で持続時間は伸びている傾向が見られる。

次に、表 4.3 でわかるように、1 拍目の持続時間の平均値がそれぞれ異なる中、「急降」ピッチを含む拍の持続時間の平均値は一部の下降ピッチを下回っている。その差

⁵ 注 4 で述べたように、10Hz 以内は「平坦」ピッチとするため、下降ピッチの最小値は 10Hz 以上になる。

⁶ 「あなどる」の 1 拍目を「急降」で発話する学習者は 1 人しかいないので、57Hz は平均値ではなく、その 1 人の値となる。

⁷ 「うちみ」を「斜降昇」で発話する学習者がいないため、平均値を 0 とする。

がわずかしかない調査語もあるが、全体的に同じ傾向が見られた。さらに、「急降」ピッチを含む拍の持続時間の平均値は下降ピッチのそれを下回るだけではなく、「あなどる」、「なだれ」、「みずひき」以外の「急降」ピッチを含む持続時間の平均値は、4 種類の下降ピッチの中で最も短いことを確認できた。

表 4.3 各下降ピッチを含む 1 拍目の平均持続時間

形状 対象語	急降(秒)	斜降(秒)	斜降昇(秒)	斜降平(秒)	4つの下降ピッチ の平均値(秒)
あなどる	0.086	0.085	0.093	0.120	0.096
いなむ	0.081	0.083	0.089	0.112	0.091
うかがう	0.088	0.089	0.093	0.121	0.098
うちみ	0.086	0.091	0.088	0.116	0.095
うとむ	0.084	0.087	0.086	0.125	0.096
なぞとき	0.112	0.119	0.127	0.126	0.121
なだれ	0.119	0.116	0.124	0.135	0.124
なつめ	0.110	0.120	0.119	0.122	0.118
にげば	0.091	0.096	0.108	0.110	0.101
にわとり	0.088	0.090	0.110	0.095	0.096
みずひき	0.124	0.122	0.131	0.127	0.126
よそおう	0.119	0.125	0.126	0.124	0.124

4.2.3 下降する幅と「急降」の持続時間の考察

4.2.1 節の分析でわかったように、母語話者の 1 拍目のピッチ曲線にやや下降する傾向も見られたが、その最大の下降でもわずか 15Hz でしかなかった。しかし、学習者の下降ピッチは形状によって、平均下降幅は約 20Hz から約 60Hz の間にある。特に「急降」の下降幅が最も激しく、平均下降幅は 50Hz 近くになっている。「急降」ピッチと他の下降ピッチとの下降幅の差、また、母語話者における下降幅との差の大きさは明白である。中国語の声調の高低は 5 段階に渡って下降したり、上昇したりする。この特徴は下降と上昇が高と低の 2 段の間で起こる日本語と大きく異なっている。5 段階を区

別する中国語母語話者の発話の声域は日本語母語話者より大きいと思われるため、この下降幅は日本語話者の値を超したと考えられる。

下降幅は最も大きい、「急降」ピッチを持つ拍の持続時間の平均値は逆に他の下降ピッチより短い。この特徴は平均持続時間がそれぞれ異なっている状況の中で、最も安定している。上に述べたように、学習者には高と低の間に 5 段階の感覚がある。学習者は自分の高低感覚で日本語の相対的に低い 1 拍目を実現したと感じるとすると、「急降」ピッチはほぼ垂直に下降するので、他の下降ピッチに比べ、最も早く目標の低さ、つまり 1 拍目の低さに到達するため、十分にそれを保つことなく、次の拍に移ろうとすると考えられる。

短い 1 拍目の持続時間が全体的な拍リズムに影響を与えるかどうかについては、本研究の範囲を超えているので、ここでの考察を控え、今後の研究課題とする。

5. まとめと今後の課題

ここまでの分析と考察の結果をまとめ、そして、本調査で配慮できなかった点と今後の課題を述べる

5.1 まとめ

本稿で扱った学習者の相対的に低い 1 拍目のピッチ曲線の特徴を以下にまとめる。

- ・ 学習者は主に下降ピッチで平板型、中高型、尾高型の相対的に低い 1 拍目を実現する傾向が見られる。
- ・ 学習者の平均的な下降幅は母語話者のより大きく、個人の場合はさらに大きな差となる。
- ・ 「急降」のピッチ曲線の平均的な下降幅は下降ピッチの中で最も大きく、その拍の持続時間の平均値は最も短い。
- ・ 学習者は日本語の相対的に低い 1 拍目を実現する際に、母語である中国語の声調のうち、第 3 声を用いたと考えられる。
- ・ 学年によって以上の特徴が一定して改善される傾向が見られず、自然習得に大きな期待ができないと思われる。

5.2 今後の課題

本稿では以上の 5 点を明らかにしたが、今後、学習者の語頭韻律に関して、さらに研究を深めなければならない課題も浮上してきた。

まず、筆者は事前に本調査への協力者となる学生の性別構成を把握できなかったため、結果として女性学習者が男性学習者よりはるかに多くなった。近年、中国の日本語専攻に所属する女性学習者が急激に増える一方、男性学習者は急激に減った。これはこれから中国の日本語学習者を調査対象とする研究においては、考慮しなければならない問題となるだろう。

次に、王(2001、2002)に言及があるように、語頭韻律には感情表出に一定の役割を果たしていると見られることから、学習者の文頭のピッチ曲線の形状の特徴をつかむだけではなく、それが日本語母語話者にどのような感情を伝えるのかという機能面についても、今後研究を行う必要がある。

最後に、本調査は対象語について親密度調査を行っていないため、親密度の違いで学習者の語頭ピッチ曲線の特徴が異なってくるかについて追跡調査を行うことが求められる。

中でも語頭韻律の感情表出の問題は今後の日本語音声研究の中でも特に重要な課題となると思われるので、最後にこの点について少し詳しく触れておきたい。

王(2002)は語頭韻律による感情表出について、「低昇」、「降昇」、「斜昇」、「平ら」、「抛昇」、「下降」などの音調によって、「当惑した気持ちの強調」、「軽蔑気持ちの強調」、「平静な感情」、「心配や深刻のような沈んだ気持ち」などの感情を表す傾向があり、平ら⇒抛昇⇒斜昇という順で強調程度も強くなると指摘した。平坦なピッチについて川上(1956)も、「その発話が平静な感情のもとに行われた」と述べた。

成田(2002)も「日本語の高低差よりもその差のひらきが大きい中国語を母語に持つ中国在住日本語学習者の語調の強さは、不確かなイントネーションとも関係し、(例えば問い返しの言葉である「えっ?」、「あああ?」、「何?」など)日本人にはかなりきつい印象を与えることがある」と中国の学習者への語調指導の重要性を訴えた。

4.1.2 でわかったように、日本語学習の進行に伴う各ピッチパタンの使用回数の増減は一定ではなく、そこに何らかの規則性を見出すことはできない。さらに、学習者は下降、平坦、上昇などのピッチが文字に付与される意味以外、パラ言語的な情報が含まれていることを知らず、母語にある、聴覚的に近い声調を代用する傾向がある。それ

によって、学習者の発話は聞き手に、不適切な場面で「強調」、「あきれる」、「軽蔑」などの感情を伝え、誤解を招く可能性がある。

現在、中国の日本語教科書は語頭韻律に含まれるパラ言語的な知識について、ほとんど詳しく載せていない。そして、中国の日本語教育における日本語教師がまだ主に中国語話者であるため、日本語らしい語頭韻律とパラ言語情報による語頭韻律の使い分けを学習者に教える難しさは想像に難くない。

筆者はふだんから周りの学習者の日本語韻律を観察しているが、勤務先で中国人留学生が日本語にはほとんどないような語調で来客に対応し、その表情を一瞬でいらしたものに変わったり、怒らせるなどの場面に遭遇することもある。学習者は丁寧に自分が伝えたいことを客に伝えているつもりだが、日本語母語話者の耳には不愉快な情報が届いているようである。ますます中国人留学生が増える中、そのような誤解から生じるミスコミュニケーションを減らすために、どのような音声指導をすべきかは、大きな現実的課題となる。

今後の調査で、日本語語頭韻律にはパラ言語的な情報が含まれており、それが異なる感情を伝える機能を持つために非常に重要であることを、中国で日本語教育に携わる者や学習者たちに再認識させ、重視するよう注意を喚起できれば幸いと思う。

許 霖

付録1 学習者の各形状のピッチ曲線図

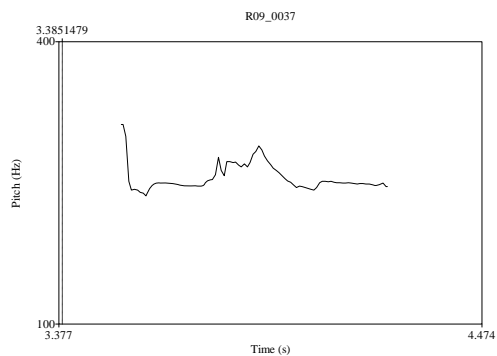


図1 「急降」にわとり

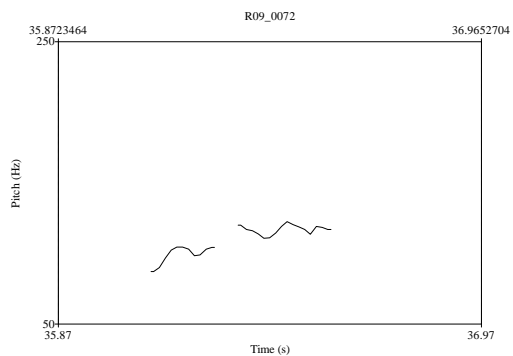


図5 「斜昇」みずひき

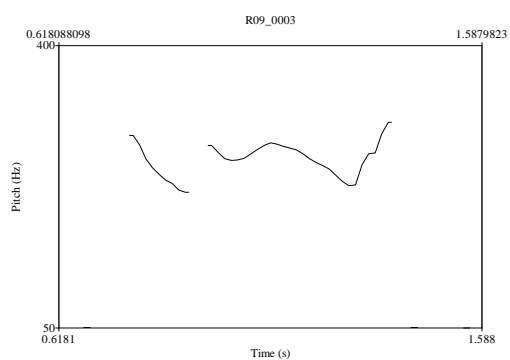


図2 「斜降」よそおう

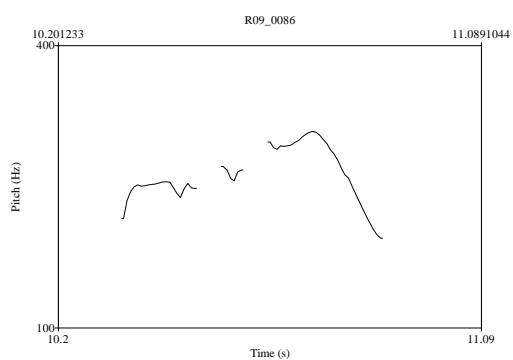


図6 「斜昇平」うかがう

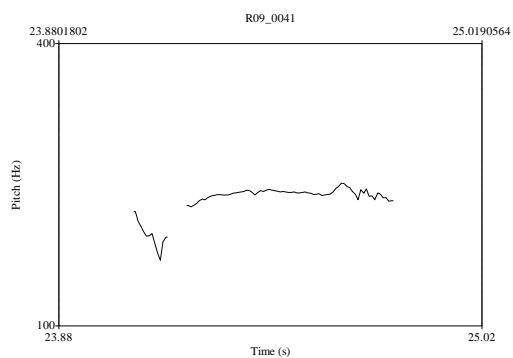


図3 「斜降昇」うとむ

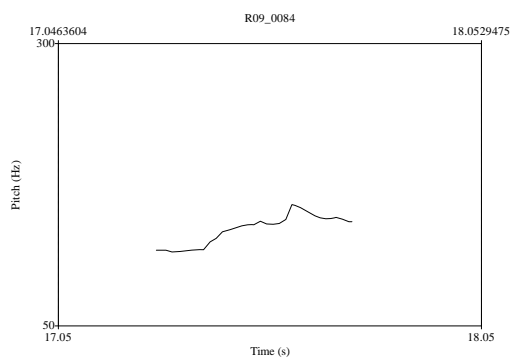


図7 「平坦」いなむ

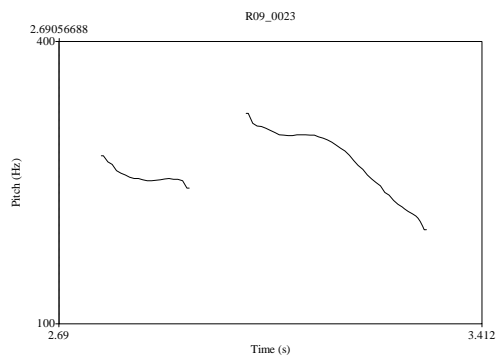


図4 「斜降平」よそおう

参考文献

- 益子幸江(1995)「発話における声のピッチ変化の音響音声学的研究」『東京外国語大学論集』第 51 号、pp.119-132
- 王 曉青(1999)「日本語語頭の拍に跨がる上昇音について」『台湾日本語文学報』14、pp.213-239
- 王 曉青(2000)「中国語の四声と日本語の東京語アクセントの対照研究—日本語アクセントの高低感覚に関する指導のために—」『台湾日本語文学報』15、pp.11-35
- 王 曉青(2001)「台湾上級日本語学習者における日本語アクセントの音声・音響的特徴について—日中両語のアクセントの高低との比較から—」『台湾日本語文学報』16、pp.75-103
- 王 曉青(2002)「日本語会話における跨拍上昇音の実態」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部 51 号、pp.291-300
- 鹿島 央(2002)『日本語教育をめざす人のための基礎から学ぶ音声学』スリーエーネットワーク出版社
- 川上 蓁(1956)「文頭のイントネーション」『国語学』25、pp.21-30
- 許 霖(2009)「中国人日本語学習者の日本語に見られる母語の韻律の干渉—三、四拍語のアクセント生成の視点から—」名古屋大学大学院 国際開発研究科修士論文
- 坂本 恵(2003)「中国人学習者のための発音指導について」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』29、pp.171-243
- 匂坂芳典(1993)「韻律制御研究の現状と課題—より自然な音声を求めて—」『日本音響学会誌』49 巻 12 号、pp.854-859
- 佐藤友則(1994)「日本語音声の評価に与える各音声要素の影響力について」『東北大学文学部日本語学科論集』第 4 号、pp.27-38
- 佐藤友則(2000)「日本語学習経験と音声評価基準との関連性について」『信州大学留学生センター紀要』第 1 号、pp.23-33
- 成田愛裕子(2002)「中国における日本語学習者のイントネーション・語調の指導—

- VCD 教材を用いた実践』『文教大学附属教育研究所紀要』第 11 号、pp.143-146
- 戸田昌幸・黄国彦(1989)『日語語音学入門』台湾鴻儒堂
- 半田達郎・福盛貴弘(2007)「イントネーション認知に関する基礎実験—事象関連電位を用いた脳波研究—」『一般言語学論叢』第 10、pp.52-77
- 山田京子他(2007)「コミュニケーションのための音声指導実践—学習者の母語の影響を観察して—」『日本語教育実践研究』創刊号
- 劉 蕾(2007)「中国語を母語とする日本語学習者の日本語に見られる母語の声調の影響」名古屋大学大学院 国際開発研究科修士論文
- 廬 嘉(2006)「大脳トップダウンに注目したイントネーション研究—中・日対照—」『一般言語学論叢』第 9 号、pp.59-79